森 茉莉

甘い蜜の部屋

mbre miellée

甘い蜜の部屋

森 茉莉

新潮社

甘い蜜の部屋
一九七五年八月三〇日發行
一九七六年五月二五日九刷
著　者　森　茉莉
發行者　佐藤亮一
發行所　新潮社
郵便番號一六二
東京都新宿區矢來町七一
電話　業務部〇三―二六六―五一一一
編集部〇三―二六六―五四一一
振替東京四―八〇八
印刷所　塚田印刷
製本所　大口製本
定價　千五百圓

© 1975 Marie Mori
Printed in Japan

亂丁・落丁本は，御面倒ですが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負擔にてお取替へいたします。

第一部　甘い蜜の部屋　5
第二部　甘い蜜の歓び　133
第三部　再び甘い蜜の部屋へ　243

装帧　池田滿寿夫

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

甘い蜜の部屋

第一部

甘い蜜の部屋

藻羅（モイラ）といふ女には不思議な、心の中の部屋がある。

その部屋は半透明で、曇り硝子（ガラス）のやうな鈍い、厚みのあるもので出来てゐて、モイラの場合、外（そと）から入つて来る感情はみな、その硝子を透して、モイラの中へ入つて来る。うれしいのも、哀しいのも、感情はみなその硝子の壁を通つて入つて来るのだが、その硝子は、どこかに曇りのある、あの本物の硝子そつくりのものであるから、その厚みの中を透して入つて来る感情はひどく要領を得ないものになつてくるのだ。

入つて来る感情は、硝子の中を通り抜けると同時にどことなく薄くなり、暈（ぼんや）りとしたものになつてゐる。その通り抜ける時の変化は、考へると、眼に見えてゐる辺りのものがうすぼやけて、遠くへ行き、頭の中が霞（かす）んでくるやうな、妙な作用である。といふのは、考へてゐる内に、眼に見えるものもだんだんとその心の中の硝子を透（す）き徹（とほ）つてくるかのやうな、妙な気がしてくるからで、そのためか、モイラは眼に見えるもの、例へば人間、花、風景、それらの、他人がはつきりと認識してゐる「現実の世界」といふものを、どこか、薄暈（うすぼんや）りとしたものとして眺めてゐる。

眼に見えてゐる花が、硝子の壜が、卓が、紅茶茶碗、銀の匙、又空も、塀の上に出てゐる他人の家の樹々も、小石、赤犬、又は卓子を距てて微笑ふ親しい人、すべてのこの世の現実が、ほんたうにそこにあるのか、ないのか、そこの境界が明瞭しない。この世界がこんなに、明瞭しないのだから、死んだあとの世界の方が却つてほんたうに、はつきりとあるのではないだらうか、と、そんなことを想つてどこかにある、もう一つの世界を空想してみる瞬間さへある。

その世界は、現実にあるやうな、曇つた硝子ではない、完全に透明な、極度に薄い透明の向うにあつて、紅い色でも、緑の色でも、みな上に綺麗な透明を、被つてゐる。ちやうど自動車や自転車に附いてゐる反射鏡に映る草原や紅い煉瓦の街のやうに、世にも綺麗で、夢かと思ふやうに恍惚とするものなのだ。

ところで、モイラの方で抱く感情、それはこつちから外へ出て行く感情の方なのだが、それも硝子の壁を出る辺りでどこかうすぼやけ、要領を得ない曇り色の中で、どこへともなく暈けていつてしまふやうすだ。それだから、感情を抱かれた相手の方も、冷淡といふのではないが、どこか朦朧としたものとして、それを受けとる。それは受けとつても、なんとなく乗つて行きにくい、感情である。それだからモイラが或日、感動してくれても、その感動を貫つた人間も、それを受けとめることは難しい。まして、一緒になつて感動するといふことは難しいことである。

小さな子供の時からモイラと遊んでゐる、野原野枝実だけが、その変なものを、モイラの感情としてうけとつてゐるもやうである。だが野原ノエミといへども、うけとるにはうけとるのだが、それがやつぱりへんな具合である。或日、いかにも真実を持つてゐる友だちらしいことを言つてくれてゐるかと思ふと、それがよくみると、どこかへらへらとしたものであつて、その場で思ひついたもののや

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

うな、疑はしい匂ひを持つたものだといふことに気づくのだ。そこでモイラを見ると、へんに空虚な顔をしてゐるのだから、やつぱり妙な、空漠としたものをうけとらないわけにはいかない。

「いいのよ。モイラは感情がないんだから。わかつてゐるわ」

野原ノエミといふ偉大なるモイラの知己は、言ふのである。

するとモイラは忽ち反撥を覚える。さうして、

(あたしだつて感情あるわ)

と、さう言つて、反抗する。だがさうやつて一応はあらがつて見たところで、それを説明する瞬間から、モイラの心の中には、はかない空洞が感ぜられ、心細さの漣のやうなものが波立つてくるのがどうせ、知れてゐるのだ。

モイラは諦め、黙り、怒りのやうなものを抑へて、ノエミから理解といふ、薄温かなものを、うけとるよりない。

この、世間では「友情」とか、「理解」とか呼ばれてゐる重みのある、薄ら温かなものは、全くもつて貴重なものである。モイラは瞬間それを知るのだが、その感情さへも又、忽ちの内にうすぼやけ、どこへともなく暈け去る。その暈け去つて行く煙のやうなものの脚を眺めながら、モイラはなんとなくがつかりして、ノエミを偸みみる。さういふ時のモイラの眼はどこか悪事を犯した人間の偸み見のやうで、あつた。これは人生の貴重な一瞬にはちがひないのだが、なんといふうす暈けた、曇り硝子の向うにあるもののやうな光景なのだらうか。

(あたしはほんたうに生きてゐるのだらうか?)(あたしはひよつとしたら、冷酷無比な悪人なのではないのだらうか? 世の中の悪人といふのは、かういふ胸の構造と仕掛けとを持つてゐる人間のこ

となのではないだらうか?)

モイラは時折、空漠とした眼になつて、呟くのだ。

その奇妙な、うす暈けた瞬間が去ると、モイラとノエミとは忽ち嬉々として、共通の友だちの百合楓に、海泡石を呉れたことについての手紙を出してゐないとか、母露生犀川の昔の友だちの家に行つてみようかとか、二三の会話を交し、その後では疣山痣子の肝臓の腫物が悪化したら、祝盃をあげようとか、蛭谷海鼠と、濁川蚯引、その細君の蛇魔子が、モイラに仕掛けた罠と窃盗行為、モイラに甘い、陶酔の管を通しておいて、その細い管からモイラの財産を吸ひ上げて行つた彼らの行為に向つて、呪ひの護摩を焚かうかとか、さういふ二人の平常の会話に、とりかかるのだ。さういふ時の二人のやうすは、二人の持つてゐる似通つた、大きな沼のやうにも見える眼のせゐか、どこか薄気味が悪く、ロオルシャハが実験に使ふ、インクの滲みの中によく出てくる、燃える火を中に向ひ合つて踊る魔女の姿にも似てゐて、互に見合つて笑ふ四つの眼は、奇妙なものを出してらんらんと、光つた。

モイラが可哀らしい、皮膚の滑らかな、円みのある背中をした、幼い娘だつたころから、モイラのこの、硝子の部屋はあつたのだが、本人が第一に気づかなかつたし、もとより他の誰にもわかるはずは、なかつた。

*　　*

モイラは大正初年の十二月の、ごく寒い日に生れた。生れたのは午後五時三十五分で、電燈の点る少し前である。モイラは蠟燭の光の中で、生れた。

満六歳の誕生日が近づいた頃、モイラは一人の、異様に可哀らしい娘に成長した。黒褐色の大きな

眼は、見開く時瞼を重く見ひらくやうな、感じがある。その大きな眼を凝と開いて、モイラはよく人を視てゐるが、モイラの眼は、見られてゐる大人にとつてなんとなく気になるものを出してゐて、それはモイラを太い、油断のならない小娘のやうにも、見せるのだ。

モイラの眼が、大人の眼を脅す、妙な力のやうなものを持つてゐるやうに見えるのは、長くて厚い睫毛のせゐや、沼のやうな光を持つてゐるせゐでは勿論ない。モイラの胸の中にある、例の硝子が原因である。モイラの見るものや、感じ取るものがすべて、どんなものでも、曇り硝子の向うにあるもののやうになつて、モイラの心に映つてゐて、そのもやもやとした要領を得ない感覚が、モイラの胸の中に低迷してゐる。モイラの眼はその低迷を、そのまま映し出してゐる窗のやうなものだからだ。中に何があるかわからない、為体の知れない、くぐもつた光が、モイラの眼に、あるからだ。

まだものを考へる力もない筈の、小さな娘のモイラの眼が、

――モイラに大した思考力がないことは、大人になつた現在も、同じことである。感覚だけで辺りを見、感覚だけで生きてゐて、それで自分は素晴しく生きてゐるのだと、信じてゐる。感覚だけで、自分は生きてゐるのだと信じてゐるのは、モイラだけに限つたことではなくて、虫や蛇や猫、女、なぞがさういふものである。彼らは例外はあつてもみな美しい。思考力を持つてゐるやうに見える女はそれを観念として、上皮からくつつけてゐるか、又は感覚的に思考を捉へてゐるのに過ぎない。――

なにかの迫るやうなものを出してくるのは、モイラが持つて生れた、一種奇妙な感情地帯のせゐである。だが考へてみると、底に何か持つてゐる、腹の知れない人間の内部といふものが大体、そんなものなのだから、モイラを、何ものかを蔵してゐる、底の知れない奴であると、さう言つたところで大

した間違ひではないかも知れない。その方がモイラの気には入るだらう。

だがなんといつても、モイラはこの十二月の二日で満六歳になつたばかりの、幼い娘である。何かを凝と視るのを止めて、人形や絵本に見入つたり、ぼんやりどこかを見てゐる時のモイラの眼は、やはり罪のない、天使にそつくりの眼であつた。

浅い襞のある唇は、薄紅くて、まだ父親の林作の頬や額、それから掌の甲、なぞにしか接吻をしたことがない。それらの接吻は林作が自分にして呉れるのを真似て、するのである。産毛のある頬と顎とに囲まれた薄紅い唇は柔かい。林作はモイラの口へ、チョコレエトなぞを一つ一つ入れてやつたり、食事の時には、自分の皿から細かく切つた肉、果実、なぞを入れてやつたりする習慣を、モイラが六歳になつた今も、止めようとはしない。そんなことをする時林作は、モイラの唇を軽く突いて、

「マシュマロォのやうだ」

と、言ふのである。さうしてモイラが大きな眼を自分から離さず、自分の掌の、皮を除けた果実に、舌を巻きつけて乳を吸ふ赤子のやうな口つきをしてしやぶりつくのに、眼を当てた。いつも何かしらんに気を奪られてゐるやうなモイラの顔の中で、薄紅い柔かな唇は、これも何かに憧憬したやうにうつとりと、弛んでゐる。

だが、モイラが何かの遊びとか、いたづらをすることを思ひついて、いざそれにとりかからうとする時、又は家政婦の柴田や、家庭教師の御包に、何かを隠さうとしてゐるやうな時、モイラは唇を固く結ぶ癖があるが、そんな時には唇の両端が頬に深い窪みをつくつて、吊り上がる。

父親の林作はモイラの、結ぶと両端が吊り上がる唇の形を賞讃してゐて、モイラの頬を指で突いては、かう言ふのだ。

「女の脣の端が平らなのはいけない。両端に窪みが出来て吊り上がる、かういふモイラのやうなのがいいのだ」

モイラの、可哀らしい顔や、円みのある背中、腕、脚、気孔が全く無いのではないかと思はれるやうな、夏なぞは呼吸が出来ないやうに思はれてモイラ自身苦しく感ずることがある、さういふ緻密な皮膚、なぞの体の特徴と一緒に、妙な子供であるところも、すべての点をひきくるめて、林作はモイラの礼讃者である。

「モイラは上等な子供だ。どこにもこんな子供はゐない」

林作はモイラを膝に乗せ、軽く背中を叩いて揺するやうにしながら、繰り返して、言つた。それは何かの呪文のやうに、モイラの耳に入つて来る。

京都にゐる林作の弟の達二が、東京に滞在中、林作の家に宿つてゐた時のことだ。モイラは、モイラを生んだ直ぐ後、子癇で死んだモイラの母親の繁世が林作等の母親の倫音の気に入らぬ後妻だつたために、モイラに愛情の薄い達二が、モイラの欲しがる京都の干菓子を故意に充分与へなかつたのに稚い反抗をして、達二の留守にその部屋に忍びこみ、棚にあつた罐から、掌に一杯の菓子を盗み出したことがある。

そんな時にも林作は、それを告げに来た達二が部屋を出て行くと、モイラを膝に乗せ、家政婦の柴田から菓子を取り上げられて、まだ砂糖の附着いてゐるモイラの小さな掌に軽く接吻をして、言つた。

「モイラは上等。モイラは上等。泥棒もモイラがやれば上等だ」

そんな時、林作の胸にはウェストミンスタアの香ひがした。ウェストミンスタアの香ひの滲みこんでゐる、羅紗の背広の胸の中で、夏は寒暖計の中心にある目盛りに似た縞柄の浴衣を着た林作の、ざ

らざらとした縮みの布地の胸に頰を寄せてゐて、モイラはこれらの言葉を、聴いた。安楽で、どこかで父親を征服したやうな気持のする、甘い歓喜をモイラは、それらの言葉から感じとつてゐた。

低い、錆びのある声で囁かれる林作の、呪文のやうな言葉は、恍惚とするやうな甘さで、モイラの精神の奥に吸ひこまれて行つて、いつの間にかモイラの心の中に理由のない自信のやうなものを、植ゑつけた。自分は善い子なのだ。自分は特別に可哀らしい子なのだ。と、モイラは信ずるやうになつた。知らず知らずに根を張つた、ひどく誘惑的なものの中で育てられた、自信である。自分は善い子で、自分を不愉快にするものはすべて悪だ、とする、enfant gâtée の自信である。

モイラは又、さういふやうな環境のせゐか、義務が嫌ひである。義務がどういふものか、まだわかつてゐない内から、義務が嫌ひである。モイラの心は、義務のやうなものはすべて、うけつけない。胃がうけつけない食物と同じである。

薄くなつて入つて来るのだらうと、暈りとだらうと、感情の方はともかく素直に入つてくるが、義務はモイラの硝子の壁が、押し戻した。これはモイラが小学校へ上がつてからのことだが、間に合ふやうに学校に行くことだとか、教師の指定した時間通りに、遠足の集合場所へ到着することだとか、さういふ、どこか強制されてやる、義務的なことはすべて、モイラの硝子の手前で遮断されて、突き戻される。モイラはさういふものを無意識に嘔吐してゐて、その後は忘れてゐる。

モイラは又、時間で何かをやること、紙の上に真直ぐな線をひくこと、紙を真直ぐに折ること、又は截ること、学校の教師がやらせること、家庭教師が傍についてゐてやらせるものは殆ど、嫌ひである。画を描く時にやらせられる、輪郭から外へはみ出さぬやうにして、一定の形の中に墨を塗ること。さういふ、義務とか、規則、正確、直線、何かの枠の中に嵌め入れて、一分もはみ出さぬやうに注意

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook